（1）提案のコンセプト

①「霊峰白山と山麓の文化的景観」

秀麗な山容の白山は日本を代表する聖地とされてきた。ここから日本海と太平洋に流れでる河川は、日本列島を横断して長い流域を潤し、山麓や平野部の人々の暮らしを支えるとともに、豊かな森と水の信仰を育んだ。白山が水の神、農耕の神、漁業の神、雪の神といわれるゆえんである。山頂と禅定道（登山道）、馬場（宗教的拠点）には白山信仰の世界を語る多くの貴重な文化遺産が存在している。また山麓の集落では、世界屈指の豪雪地帯である厳しい自然環境の中でたくましく生き続けてきた、白山をめぐる信仰と生活と生業を表す、希有な文化的景観が継承されており、日本人の信仰と暮らしの原風景として、顕著な普遍的価値を有する。

（1）白山の自然と歴史

日本列島のほぼ中央部に位置する白山（標高 2,702 メートル）では山岳信仰の世界を形成する。また白山連峰は高山植物の宝庫で、雪解けの頃、花々が一斉に咲き誇る光景は壮観である。国指定天然記念物のカモシカをはじめ、多彩な動物や鳥類も生息し、ＩＵＣＮ（国際自然保護連合）認定の保護区域、ユネスコの生物圏保存地域にも指定されている。

白山信仰の歴史は、「越の大徳」とも呼ばれた泰澄が奈良時代の養老元年（717 年）に登頂したことに始まるとされ、越前には越知山を始めとした泰澄ゆかりの遺跡も存在する。泰澄が木彫仏を始め、それが神仏習合につながっていったとの説もある。やがて平安時代になると、自然崇拝の山から神仏習合や修験道に彩られた、観音の聖地と仰がれるようになり、「越の白山」と讃えられて、都びとの憧憬の対象とされた。禅定道の基点には加賀、越前と美濃の三馬場が開かれ、中世には、三馬場は地域の有力寺社として、一大勢力を形成する一方、白山信仰の全国発展の拠点となった。

（2）白山信仰と三馬場・禅定道の文化遺産群

山頂においては９世紀後半の考古資料が確認できる。10 世紀中頃から 11 世紀には山頂祭祀が本格化し、12 世紀には経塚がみられるなど白山修験道が定着した。中世を通じて山岳修験が盛んに行われ、山頂の室堂や三馬場・三禅定道の社堂などの整備が図られた。越前では深厳な平泉寺境内があり、中世の苔むす石垣が当時の景観を感じさせる。また、これに隣接して六千坊といわれた僧坊の遺構が検出されている。美濃では石徹白の社叢や御師集落が前近代の景観を残すとともに、明治の神仏分離後も白山神社の境内に長滝寺が並存し、かつての神仏習合の雰囲気を色濃く残し、長滝の延年などの祝祭と相まって、日本の宗教的世界の原風景を強く感じさせる。

（3）山麓の暮らしと文化

山麓の暮らしは、厳しい自然環境の中で、白山信仰を受け継ぎ、豊かな自然や動物とともに共生し、たくましく白山を守り続けてきた。また、山麓には白山本地の阿弥陀信仰に通ずる遺構や伝説的巨樹が知られる。白峰地方では出作り小屋による焼畑農業や養蚕が営まれてきた民俗遺産が残るほか、豪雪に適合した大壁造りの町並みが残っている。また、山麓には木偶まわしなどの古くから伝承されてきた多くの民俗芸能があり、白山信仰の心を今に伝え、山麓の居住景観と一体となって、豪雪地帯特有の文化的景観を形成している。

民俗芸能の面に関しては、白山本宮では中世から祭礼が行われ、神楽や猿楽が奉納され、鎌倉期には白山猿楽座がみられる。白山比咩神社をはじめ全国の白山社に残る能面に芸能伝播がうかがえる。

(1)-② 「霊峰白山と山麓の文化的景観」 写真

№１２　　白山山頂･禅定道遺跡群

№１６　　越前禅定道

№１１　白山市街地から仰ぐ白山

№１４　　白山平泉寺旧境内

№１３　　白峰の伝統的建造物群

№８　　白山比咩神社境内参道

参考№７　　長滝の延年

№２５　　白山長滝神社･長滝寺境内の景観

(1) -③ 資産全体の位置図

8,9,10
4
3
4
1,5,6
7,13
2
11,12
16
14,15
17
24
21,22,23,26
27
19
18,20,25
能美市
大野市
勝山市
高山市
郡上市
石川県
福井県
岐阜県
金沢
高山